



C A P T O R

ORIGINAL EDITION

FOR ADULT ONLY

MECHI

今日は、昼から雑誌のインタビューと撮影が予定されていた。

来月オンエアされる僕主演の新ドラマのPRを兼ねて、ハイブランド専門の一流ファッション誌「FAME」で組まれた特集は、あるブランドとコラボした「僕の最新モードスタイル」。20ページが予定されている次の目玉企画で、もちろん僕が表紙を飾る。

映画にしろドラマにしろ、よくあるプロモーションの一つで断る選択肢はない。

気乗りのしない腹を抱えてスタジオに向かうのも慣れたもので、バーモンジューのスタジオに着くとマネージャーのクレアが開口一番、「おはよう、今日も完全に顔がいい、最高にセクシーね」とグラデサイズのカップをくれた。

Coffee NERO のアメリカンは、ダメな日のとっておきの慰めだ。

「わかつてる」

関係者達を素通りして控室代わりのメイクルームに

行き、コーヒーで目を覚ましながらクレアからスケジュールと概要を聞いた。

1時間のロングインタビューの後、3回の着替えを挟んで夜までたっぷり写真撮影^{フォトシュート}が待っている。

インタビューの後に長めの休憩が取られているのも、普通なら用意されないケータリングが呼ばれているのも、この類の撮影がとにかく嫌いな僕のためだろう。ところが、いつもならこんな日は僕に極力気を使うはずのクレアがやけにウキウキと「面白くなりそう」なんて言うから、へそを曲げてやりたくなかった。

「何が？フォトの最後のコンセプトなんてクソくらえだよ、ジェンダーレスを超えるってナニ？」

ほぼカタログみたいな内容の資料をパラパラめくり、確認したアクセサリーやジュエリーはユニセックスを謳っているが、控えめに言っても女性ラインにしか見えない。合わせる服や小物を見ても、その装いはクイア好みに思えた。

「そういうこと、外では言わないで」